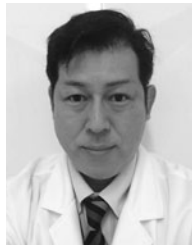


就任のご挨拶

泌尿器科学講座 教授 井上 啓史



平成28年4月1日付けで、高知大学医学部泌尿器科学講座教授を拝命致しました。何卒よろしくお願ひ申し上げます。

私は、高知市出身です。高知医科大学に6期生として入学し、平成元年に卒業後、藤田幸利初代教授が主宰される泌尿器科学教室に入局させて頂きました。大学院に入学後、当時大舘祐治前教授主宰の病理学講座において、降幡陸夫現教授のご指導の下、腫瘍病理学や分子生物学を主とした研究基礎を学ばせて頂きました。平成7年よりは、執印太郎第2代教授のご指導の下、高知大学医学部泌尿器科学教室にて、更なる臨床・研究の修練を積ませて頂き、平成9年よりは、米国テキサス大学 MDアンダーソン癌センターにPost-doctoral Fellowとして留学。癌生物学のIsaiah J Fidler教授および泌尿器科学のColin PN Dinney教授のご指導の下、腫瘍における血管新生メカニズムの解明および抗血管新生治療薬の開発というテーマで研究させて頂き、現在薬事承認されているセツキシマブやラムシルマブなどの前臨床試験に携わることができ貴重な経験となりました。帰国後は、この血管新生の研究テーマに加えて、光線力学に基づく新たな診断法や治療法の開発にも携わり、日本のみならず中東や欧州の研究者とも学術連携を組み研究に従事することができました。臨床においては、より低侵襲な医療技術、特に泌尿器科腹腔鏡手術やロボット支援手術の臨床導入・実施に注力してまいりました。

全国に先行して人口が減少し、高齢化が進むこと高知県だからこそ、前立腺がんをはじめとする泌尿器がん、さらには排尿機能の問題など、われわれ泌尿器科医が担い解決すべき課題は多いと考えます。甚だ微力ではございますが、優れた医療人を育成し、母校である高知大学、さらには泌尿器科学の発展を目指して、地域と世界を意識した教育・研究・診療に邁進していく所存です。今後ともなお一層のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

全国に先行して人口が減少し、高齢化が進むこと高知県だからこそ、前立腺がんをはじめとする泌尿器がん、さらには排尿機能の問題など、われわれ泌尿器科医が担い解決すべき課題は多いと考えます。甚だ微力ではございますが、優れた医療人を育成し、母校である高知大学、さらには泌尿器科学の発展を目指して、地域と世界を意識した教育・研究・診療に邁進していく所存です。今後ともなお一層のご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

就任のご挨拶および 病理診断科の設置について

病理診断科 科長 村上 一郎



平成28年4月1日、高知大学医学部附属病院の診療科に新たに病理診断科が設置され、科長を拝命しました。何卒よろしくお願ひいたします。

従来、附属病院においては、中央診療施設に病理診断部が設置されていますが、診療科に病理診断科を

加えて「病理説明外来」を担当させて頂く事となりました。病理診断担当:病理診断部、病理説明外来担当:病理診断科と言う区分けで業務を分担する形で進めて参ります。病理診断科開設により、

1) 病理説明外来

患者さんは、病理診断を病理専門医から、直接聞く事ができ、病気に対する理解が深まり、治療に積極的になる事が期待されます。

2) セカンドオピニオン外来

他の施設で受けた病理診断について、改めて説明を受ける事ができます。

等のメリットがあると考えています。

外来診療を行う場所は総合診療部の1診(水曜日午後13:30~14:00)で、完全予約制です。スタッフは、私以外に副科長:弘井 誠(病理診断部部長)、医局長:倉林 睦(病理学講座准教授)、外来医長:長沼 誠二(病理学講座助教)、戸井 慎(病理診断部副部长)、降幡 陸夫(病理学講座教授)、他4名で総勢10人の病理医が対応する予定です。

病理説明外来では、癌患者さんに対する説明を中心に考えています。日本人の二人に一人は癌になり、三人に一人は癌で亡くなる時代ですので、全国で言えば、6000万人、高知県で言えば35万人が対象となります。癌の中でも、鳥取大学等における実際の経験から言えば、乳癌患者さんの病理説明外来に対するご希望が圧倒的に多い印象です。乳癌は、日本全体では年間6万人が発症すると推定されており、その数から単純に計算すると高知では、350人という事になります。350人の内、110人程度が当院にて手術がなされるので、その方々を中心に対応する事になると思われます。もちろん、乳癌患者さんに限らずお受け致しますので、よろしくお願ひいたします。

病理診断科 科長:村上 一郎

◆外来診療日:水曜日午後(完全予約制)

問い合わせ先

病理診断部 (内)23562、(外)088-880-2689